

夢の記述——『マクシマス詩篇』『トゥイスト』について——(下)

平 野 順 雄

〔前号目次〕

序

I 『マクシマス詩篇』『トゥイスト』試訳

II 『トゥイスト』読解

1 記憶の水脈

(1) ウースター発路面電車「追憶号」

(2) グロスター発「沿岸航海号」

〔本号目次〕

II 『トゥイスト』読解——後編——

2 夢の記述

(1) 妻の新たな出産

(2) 詩論

(3) 約束の地

(4) 出奔した妻の住居

(5) おもちゃの家での目覚め

II 『トゥイスト』読解——後編——

幼年時代の想い出を語る声を手掛かりに記憶の水脈を遡ったわれ

われが知ったことは、記憶の水脈が性体験への憧れと『マクシマス詩篇』の初まりへ向かって大きく開いているという一事であった。次にわれわれが問うべきは、『トゥイスト』を形成する第二の声——夜の夢を語る声——がテキストをどのように開いて行くか、である。

2 夢の記述

「トゥイスト」に導入されている夢は、

(1) 妻の新たな出産(冒頭節)

(2) 詩論と師エズラ・パウンド(冒頭節)

(3) 約束の地への旅(一節末尾)

(4) 出奔した妻の住居(二節半ば)

(5) おもちゃの家での目覚め(三節初め)

の五つである。夢の中でマクシマスが演ずる役割は、夢の内容に応じて変化する。(1)生まれたばかりの赤ん坊の父、(2)詩作の心構えを語る詩人、(3)性の快楽へ向かって記憶の風景の中へ再び入って行く青年、(4)妻の性から隔てられていることを確認する夫、(5)超現実的な風景の中を通って家路を急ぐ少年、がそれだ。これらの夢が、性に関しては記憶を補完しつつ(3)、正の方向(1)と負の方向(4)へ詩を展

開させていること、詩作に関してはメタ・ポエトリーの側面を開示すると共に(2)、お伽話の要素を取り込んでいること(5)、は容易に見て取れよう。だが、肝腎なのは、これらの夢が詩中で果たす機能である。以下、順次テクストを追いつつ夢の機能を検討してみよう。

(1)妻の新たな出産

妻が新たに赤ん坊を生むのも

そんな線路の終点にある

家でのこと。出産した翌日には

家に帰れる状態。赤ん坊もそう。

ひととき健康で発育も上々

(傍点平野)

10

「そんな線路」とは、前節記憶の水脈で検討した路面電車「追憶号」が走る線路と同じような線路の謂である。記憶の水脈を遡る路面電車「追憶号」の線路は、マクシマスをオルソンの少年時代の記憶へ導いていた。そして妻が新たに赤ん坊を生んだ夢(夢一)は、少年時代の記憶に呼び出されるかのように出てくるのである。

(タトナック・スクエアに着き、

終点から徒歩で

パクストンへ向かい、五月の花を摘む

5

あるいは旧道を通って、ホールデンへ向かい
イギリス・クルミを集める

妻が新たに赤ん坊を生むのも

そんな線路の終点にある、
家でのこと……

(傍点平野) 10

七八

夢の体験は、記憶の風景と同じく、「線路の終点」から始まっている。開口一番「路面電車こそ／おれの内陸水路」と歌い始められた「トウイスト」の路面電車は、確かにマクシマスを「内陸」へ運んで行く「水路」なのだ。「内陸」は「内部」であり、「水路」は記憶と夢の「経路」である。だから、「路面電車こそ／おれの内陸水路」という第一声の後につけられた括弧が閉じられていないため、記憶の風景と夢の体験が括弧の中で睦み合うように見えたとしても、不思議はない。時間軸が存在しないように書かれている記憶の風景と夢の体験とは、極めて自然に結びつくように見えるのだ。あたかも「五月の花」を摘み、「イギリス・クルミ」を集める人物の妻が「新たに赤ん坊を生む」という風に。無論、「五月の花」を摘み、「イギリス・クルミ」を集める人物が少年オルソンだと承知しているわれわれは、記憶の風景と夢の体験を、それほど直に結びつけはしない。父に連れられて花や木の実を採集する少年に妻がいるとは考えにくいからだ。

だが、少年オルソンに関する伝記的事実をわれわれが知らないとしたらどうだろう？ 記憶の風景と夢の体験は断絶することなく、マクシマスの内部で融合するのではないか。花や木の実を集める人物の妻が「新たに赤ん坊を生む」という、見ようによっては性役割にひねりが加えられた画像が、記憶と夢の間に一瞬浮かび上がるのである。

しかし、記憶の風景(三十七行)と夢の体験(八一二行)との間に立ち現れる少年とも大人ともつかぬ人物にとつてさえ、夢の進

行速度はあまりにも速い。

「線路の終点にある／家」での出産は、極めてスピーディなのだ。赤ん坊が生まれる「家」の位置が示されるや、「赤ん坊」は無事生まれている。「妻」は出産の「翌日には／家に帰れる」ほどお産からの回復が速く、「赤ん坊」はといえば「ひととき健康で発育も上々」(exceptionally well & advanced)なのだから。予定が即座に事実となつて結実し、結実した事実更にその先へ向かつて既に進んでしまつてゐる世界が夢——の世界である。通常要する時間は、ここでは全く不要なのである。時より事が速く進行する世界だ。

したがって、記憶の風景と夢の体験を媒介するためには、記憶の中の少年は即座に夢の中の大人にならなければならない。そして、次は詩人に。

(2) 詩論

あるいは、高らかに歌うことと

物そのものに

歌をひそませることを

区別する、あいつとおれ。

あいつに おれは花を

(キセニアを) 植えてやる

あいつの家の

中の、湿った土に

「あいつ」とは、バトリックによればエズラ・パウンドの事である。一九五三年五月、パウンドが「師」としてオルソンの夢に現れ、これをオルソンはノートブックに記した。「高らかに歌う」と物そ

のものに歌をひそませることをパウンドは区別——そして、おれはパウンドの家の(中の!) 湿った土にゼニア等を植えている。²⁾「花の名がゼニア (zenias) からキセニア (xenia [zine]) に変えられ綴字が正しくなっていること、」パウンドは区別 (Pound's dist...) が、「あいつとおれは区別する」(he and I distinguish...) に変わつてゐることを除けば、ノートブックと前掲引用との間にほとんど差異はない。最も大切なことは、「高らかに歌う」と物そのものに歌をひそませる「主体がノートブックではパウンド一人であつたものが、詩ではパウンドとマクシマスの二人になつてゐることである。しかもパウンドという強烈な固有名詞は消され、一般的な人称代名詞「あいつ」(he) に平準化されている。こうして、夢では「師」であつたパウンドは、詩では対等な仲間の位置に置き直される。そして顔を消した償いでもあるかのように「おれ」は「あいつ」に「花」を「植えてやる」のだ。

ホールバーグは、この箇所について魅力的な解釈を提出している「高らかに歌う」パウンドの詩法と「物そのものに歌をひそませる」自らの詩法をオルソンが区別している、と解すのだ。³⁾この解釈に従うなら、

あいつとおれの違いは

高らかに歌うことと

物そのものに

歌をひそませること

となろうが、原文 "Or he and I distinguish/ between chanting, / and letting the song lie/ in the thing itself" はホールバーグの言うようには

読めない。「高らかに歌うことと／物そのものに／歌をひそませること」を区別しているのは、「あいとおれ」の二人なのだから。確かにパウンドの『キャントーズ』では詩句が「高らかに」歌い、オルソンの『マクシマス詩篇』では詩的ならざる詩の構成要素がじつくりとした調べを奏で出す。だから、パウンドの詩法とオルソンの詩法との違いを語るホールバーグは、基本的に正しいのだが、文法的には誤っている。

ここで行われていることは、パウンドに対して距離を取ることではなく、パウンドとはむしろ手を組み、それ以外の詩人達と距離を取るようなのである。「高らかに歌う」パウンドを「物そのものに歌をひそませる」側に引き入れること、と言ってもよい。

では、「花」を植える行為は何を意味するだろう？ ノートブックに夢を記しながら、「パウンドの家の（中の！）湿った土にゼニア等々」を植える自分自身にオルソンは驚いている。驚きの理由は少なくとも三つあるだろう。①オルソンがパウンドの信奉者の役割を果たしていること、②どこか性的な「家の（中の！）湿った土」は、パウンドの詩の母胎を暗示すること、③植える「花」＝「ゼニア等々」(zenias etc) は、詩で正されるように「キセニア」(xenia) であること。「キセニア」とは、交配の雄植物の形質が雌植物の胚乳に現れる現象の謂であって、花ではないのだ。ギリシャ語の xenia 「接待」に由来し、語源は更に「客」「見知らぬ人」を意味する xenos に遡る語なのである。

ならば、「パウンドの家の（中の！）湿った土」に「ゼニア等々」を植える夢は、①師パウンドに迫り、②パウンドの詩の母胎と交わり、③パウンドの詩法にオルソンの詩法を割り込ませ、新たな伝統を形成するよう促していることになる。「客」オルソンが、パウンド

の「家」を占拠してしまうのが夢の内実なのだ。夢を記したノートブックの中では師弟関係の逆転が起こるのである。

しかし、詩テクスト中の夢の記述に戻って見ると、不思議なことにこの逆転現象は影をひそめる。「おれ」＝マクシマスは、盟友である「あいっ」に対して、極めて大らかに花ならぬ「花」キセニアを植えてやっているように見えるのだ。パウンドとオルソンの師弟関係逆転劇は、ノートブック段階で既に済み、詩テクストにおいてはその痕跡すら留めていないのである。見事な跳躍ではないか！ ノートブックでは弟子であつたオルソンが、詩テクストでは盟友に対する師マクシマスに変じているのだから。花ならぬ「花」キセニアは、マクシマスの詩法を「あいっ」に受け継がせる媒体なのである。つまり、夢一二はマクシマスを定立しようとする詩作の現在に向かつて大きく開いているのだ。

だから、夢一二に直統する詩行「最初の詩に書いたとおり／潮が満ちると／アニスクラム河は、ふくれ上がる。彼女が／バイアスに断つて、作ったフランス風／ドレスのように」が、夢一二の詩作を促しつつ、夢一二の赤ん坊の極めて順調な出産と発育を寿いでいるように見えても不思議はない。「潮が満ちると／アニスクラム河は、ふくれ上がる」という一見何でもない記述は、体内に満ちる詩想と妻の妊娠および出産とを重ね合わせる詩行だからだ。

「路面電車」に乗って「内陸水路」(inland waters) を旅する過程で、生まれ故郷ウースターに記憶の水脈を遡り、夢の回路を通つた「おれ」は、グロスターの感潮河川アニスクラム河と一体化しているのだ。したがって、冒頭節を結ぶ最終三行

ああ おれの小潮、

おれの大潮、わが
流れよ

は、マクシマスの幼年時代(小潮 my neap)、青年期(大潮 my spring tide)、壮年期まで(わが流れ my waters)を表わすと共に詩想と性的成熟の度合いをも表わしていることは言うまでもない。語り手マクシマスは、作者オルソンの記憶と夢を生き直し、かつそれらの外部へ踏み出す詩的主体なのである。冒頭節から分かるのは、以上のことである。

(3) 約束の地

今でも、約束の地としか思えない場所へ

幾組ものカップルは、向かつて行つたのだつた。おれたちから
直角に離れて。グロスターとボストンとの間に
立ち現われる、あの風景の中へ

わくわくと、胸ときめかせ、おれは入つて行く
住居を下に見おろして

50

「約束の地」とは、ウースター郊外パクストンで休日を楽しむ男女のカップルが向かつて行つた場所を指す。父に連れられ、木の実や花を摘んでいた少年オルソンにとつて、大人の男女が「どこへ行くのか、不思議で／しようがない」(三六―三七行)のであったが、大人になつた今にして知るのだ。「約束の地」とは、性の快楽を約束する場所であつたことを。だから、「あの風景」の中へ「わくわくと、胸ときめかせ」入つて行く夢は、過去において叶えられなかつた性への憧れを満たす夢であることになる。

ただ不思議なのは、パクストン体験を語る部分(二九―四三行)と前掲引用との間に、詩作の現時点を示す記述が割り込んでゐることである。「今頃やつと分かつた。セヴァーン河だつたのだ。／ウースターからグロスターを通つて／ブリスト―とスミスが呼んだ町に流れ込む河は。」(四四―四六行)がそれだ。生まれ故郷ウースターと第二の故郷グロスターの名の元になつたイギリスの二つの町を結ぶ河を調べてゐるオルソンがここに顔を出している。だが、いかにも唐突なこの三行によつて、パクストン体験が一度断ち切られると共に、大人になつたオルソンが現在の時点から少年時の体験を振り返ることが出来るのも事実である。少年オルソンの世界には、「セヴァーン河」など存在しない。彼にとつてマサチューセツツ州のウースターとグロスターが全てなのだ。だから「セヴァーン河」に関する記述は、少年オルソンの世界の狭さを示す符牒となる。とはいへ、大人になつたオルソンとて「セヴァーン河」の名を「今頃やつと分かつた」と言うのだから、拘つてゐるのはやはりマサチューセツツ州ウースターとグロスターなのだ。一旦断ち切つたパクストン体験に、詩は是非とも立ち返らなければならない。夢が生まれるのは、記憶と現在との間だからである。

約束の地へ旅する夢をもう一度ふり返つてみよう。すると、全く同じに見えた「約束の地」と「あの風景」とが微妙に違ふことに気づく。というのは、「約束の地」はウースター郊外パクストンで休日を楽しむ男女が向かつて行つた場所であるのに対して、「あの風景」は「グロスターとボストンとの間に／立ち現われる」とされてゐるからだ。ウースターは、ボストンから西へ三七マイル離れ、グロスターは、ボストンから北東へ二七マイル離れた所にある。だから「グロスターとボストンとの間に」ウースター郊外パクストンは現われ

るはずがないのである。現われるはずのない「約束の地」が「あの風景」として「立ち現われる」時、「約束の地」はバクストン体験を離れ、性への憧れを満たす未来形の夢に変容しているのだ。

こうして第一節に描かれる記憶と夢―三は、性への憧れに向かつて開いて行くが、第二節の夢は一転して性の暗部を体験させる。

(4) 出奔した妻の住居

おれのもとを去った後、

妻が棲んでいた

アパートは

ケーキのよう

居場所を突きとめた時、

――アパートの住人は、かつてチャールズ通りで

一階下に住んでいたマコーマーの手合い――隣の部屋から

山高帽を被った男が、そそくさと出て行った

妻のアソコに

弾丸をおち込んだ奴だ

でなけりや、馬券屋

シウオーツか。こいつの義母となら

大はしやぎで寝たものを

部屋の（建物は

お菓子^{ドボシユトル}の家）ドアは

ずいぶん高い所についていて

75

70

65

60

四十八号室と机がある

ドアは小さく

まるでオーヴンの扉

悲惨でありながらどこか滑稽なこの夢は、元はもつとこみ入った夢だった。ノートブックに記された一九五三年五月十五日付の夢はバトリックの転写によると次のようなものであった。「コン」はオルソンの最初の妻コンスタンスの愛称であり、「ケイト」は、オルソンとコンの間に出来た娘の名である。

コンがおれのもとを去って、ボヘミア風でもあり、ジンジャーブレッドのようでもあるアパートに住んでいる夢を見た――異なった階に幾つもの部屋があつて、このアパートの暮らしは小人がケーキの中に住んでいるような感じだ。

コンが引越したらしい日の朝、おれはケイトを連れて会いに行った。がつしりした女がいた。看護婦かコンの友達らしい……が、おれを妻に会わせようとしな。ケイトを何だか自分の後にろに隠して。頭に来て殴ろうとすると、コンのいる部屋を教えられた――四十八―五十。それが部屋だと思つた（探し回つた時、このアパートが陽気で、キャンデイのような感じがした。初めタイプライターの音が聞こえたので、コンが打っているのだと思つたが違つた。その部屋に着くと夢は途切れた。

アパートに近づいて行つた時、隣の家に気づいた。そこがギヤングの隠れ家だとすぐに分かつた。ちょうどその時、戸口に入つて行くギヤング（予想屋か馬券屋）の背中が確かに見えた。

ノートブックに記された夢も、詩テクストの夢も、妻の性から隔てられていることに変わりはない。ノートブックでは、「がつしりした女」(a heavy woman)が、オルソンと妻の間に立ちほだかり、娘のケイトをもオルソンから遠ざけようとするなど、タイプライターの音がする部屋こそ妻の部屋だと考えて行つてみるが、そうではないこと、ギヤングが隣の家に入つて行くことなど、詩テクストの夢とは違つた記述がなされてはいない。しかし、ケーキを思わせるアパートに移り住んだ妻の性が、「おれ」に対しては閉ざされ、他の男に対して開かれていた点は、ノートブックでも詩テクストでも同じである。もつともノートブックでは「ボヘミア風」という語と「陽気な」という語によつて、性的奔放が暗示されるのに対して、詩テクストの方はより直截に「妻のアソコに／弾丸をぶち込んだ奴だ」としてある点に違いはあるのだが。

だが、ノートブックと詩テクストとの決定的なちがいは、詩テクストに記憶が入り込むことだ。「チャールズ通り」は、オルソンがハーヴァード時代の最後を過ごした建物のある通りの名であり、当時の性的エピソードに結びつく。また「シユウオーツの義母」は翌一九三九年冬、共にアニスクアム河を舟で下り、「犬岩」に衝突する難を逃れた時、彼女を題材に神話を書こうとした女性なのである。だから、一九五三年五月十五日に見た夢を詩テクストに記述する際に、一九三八年と一九三九年の記憶が滑り込んでいることになる。「おれ」の方も負けてはいない。と言う訳だ。しかし、詩テクストに過去の性的記憶を滑り込ませたとしても、どうなるというものでもない。訳注に示したとおり、「アパートの住人」は妻コニーのいとこ「マコーマーの手合い」なのだから、妻側の連中にちがいないし、妻と「山高帽を被つた男」の情事は既に済んでいる。仮に妻の情事の

相手が「シユウオーツ」だったとしても、その「義母」と「大はしやぎで寝た」ところで、妻の性が「おれ」に対して閉じられていることに変わりはないからだ。「ずいぶん高い所」についている「オーヴンの扉」のような小さい「ドア」は、「おれ」を入れまいとする妻の心を余す所なく示してはいないだろうか。ならば、ノートブックと詩テクストとの決定的なちがいは、妻の拒絶の徹底度にあると言ふべきかもしれない。

とはいえ、「おれ」にとつて悲惨なはずの詩テクストの夢は、それほど深刻には見えない。「ケーキ」のような「アパート」、「お菓子の家」、「オーヴンの扉」のように小さい「ドア」といったお伽話の道具立ては深刻さと相容れないし、「おれ」の反応も軽い。妻の性が「おれ」以外の人物に対して開かれ、「おれ」に対しては閉ざされている点にこそ事態の深刻さがあるのに、「おれ」は、それに気付かないかの如く「シユウオーツの義母」との性交願望を口にしてはばからないところが、そこはかとなく滑稽だからだ。

しかし、自らの行為の滑稽さを「おれ」マクシマスは、誰よりもよく知つてゐる。詩テクストの夢の記述に直統する数行「港は／聖ヴァレンティン・デイの夜と同じ／風。空／海 陸 の区別なく、宙を乱舞する／氷と 風と 雪は (ピシアスよ) ひとつ」(七九—八三行)の「風」は、マクシマスの心内を吹き荒れる「嵐」でなければ何だというのか。一九四〇年二月十四日アン岬を襲つた暴風雪と化したマクシマスは、妻との間に生じた距離を「ケーキ」のような「アパート」もろとも粉みじんに吹き飛ばすだろう。果して二節結びは、矛盾に満ち、激しく、かつ安らかである。

空からケーキが降ってくる

おれと同じくらい静かに

あの夜のブリザードと

同じくらい静かに

85

紙の村。

八四

ここでわれわれは想い出さなくてはならない。この夢―四に先行する二節冒頭で描かれていたのは、五才の時父母に伴われて初めてグロスターを訪れた少年オルソンであったことを。夢―四直前の数行はこうだ。「ジョニーズ・キャンディ・キッチン店内から／窓ガラス越しに雨を透かして見たのが／海を見た／初め（五六―五九行）。ならば、こう言えるのではないか。少年オルソンにとつて性の暗部をかいま見ることこそ「海」との出会いであつた、と。

三節冒頭に置かれた第五の夢に移ろう。

(5) おもちゃの家での目覚め

訪ねて行つた

おもちゃの家で目覚めた時、窓の

外の景色が

贈つてくれたのは、朝陽の

白と、シャベルを使う

人びとの姿

90

大あわてで

家に帰つた

95

運河のあたり一帯は

ヴァンドラ伯母さんがくれた

バトリックによれば、一九五三年五月九日か十日に見た夢としてオルソンは次のようにノートブックに記しているという。「外にいた。通りで、早朝だつた……（後は忘れてしまった）。ひどく嫌な夢で――おれは疲れ果てていた――強く母を感じた（何かが、その村にいた――グロスターの家だろうか？――父親だろうか？）。村の家々は頑丈で子供の頃持っていたボール紙の村のようだつた……」オルソンの父カールは一九三五年に死に、母は一九五〇年に死んでゐるから、不気味な夢に思われたのかも知れないが、何故「ひどく嫌な夢」(A damned unpleasant dream)と記したのか判然としない。ノートブックの夢と詩テクストの夢の記述との共通点は「早朝」だということと「紙の村」が出て来ることくらいで、他にはない。父や母に関する夢はノートブックに散見するが、ここでは問題にしないことにする。

詩テクストに戻ると、これまで見てきた夢の記述とこの夢とが大きくちがつてゐることに気づくだろう、というのは、これまで見た四つの夢が少年時代の記憶と詩作の現在との間に生じ、マクシマス定立に向かつていたのに対し、この夢―五は、夢からの覚醒に向かうからである。

「おもちゃの家で目覚めた」少年マクシマスは、外で既に働いてゐる「人びとの姿」を見て、「大あわてで」帰宅するのだが、この時目にする風景は、やはりおもちゃの風景なのだ。夢の中での目覚めが、目覚めでないことに少年マクシマスは気付かずにはいられないだろう。夢―五の数行先に「ニューヨーク三番街の高架鉄道は／取り壊しになるが」(二〇二―二三行)という詩作の現在時が入り込んだ後、

大人とも子供ともつかぬマクシマスがこう語る時

モノレールに

列車を走らせると、

——幾晩も前のことではない——

虜になつてしまふのだ、河の姿に。

まさしく、橋のところで

流出し、流入する河の姿に

夢の風景はかき消え、現実のアニスクラム河が前面に出てくる。続いて「はつきりと見えてくる／発見サレザル地、／背後にひかえる湿地や、プリンマンの造つた溝、潮に洗われ／唸り声を上げる犬岩」(二二——二四行)と列挙されると、この箇所はアニスクラム河が海に注ぐ付近の描写である、とわれわれは思う。だが、事はそう単純ではない。おもちゃの「モノレールに／列車を走らせる」のは夜の室内であつて、決してアニスクラム河河口付近ではないからだ。つまり、「流出し、流入する河の姿」の「虜」になるマクシマスは現実のアニスクラム河を見ているのではなく、幻視しているのだ。そして、夢から覚醒した後にマクシマスが幻視する現実のアニスクラム河は、ブラックマウンテンでこの箇所を書く作者オルソンの記憶の中から導き出された風景であることは、言うまでもない。ここでも記憶は詩作の現在に向かつて大きく開いているのだ。

アニスクラム河と海との出合いを最後まで追つてみよう。

河の潮は、上流で唸っているが

出番が来ると、萼と花冠をはじき
犬岩をかすめて急行させる

花々は折れる

(八月)

が、葯は

いまの花糸は、花の塊りは
進み続け、

そのすべてが

この針先の一点に
達すると

回り出すのだ

今日の陽ざしを浴びて

この真実の物語の中で

そこでは、砕けた花々の水路が幾筋もの道になり

ここでは、ブラックベリーが花をつける

ここで言及されている花は、海難による死者を弔うために毎年八月の日曜日にグロスターで行われる行事に関係がある。親類や友人が運河に集まり、海へ出て行く潮に花束を投げると、海という巨大な墓に花々がたむけられるのだ。この行事の様子は「マクシマスよ

り、グロスターへ、七月十九日 日曜」(Maximus, to Gloucester, Sunday, July 19)の中で、こう書かれている。

花が

海の性格を

変える 波が

花の運命をはね上げ 溺死した男たちが、よみがえる

渦の中

眼の渦の中

花の渦の中で

海の眼が

おし開かれ

悲惨な死が

滅ぶ

152

I. 152

「トゥイスト」に戻ろう。アニスクラム河の潮に乗って海へ出る時、「犬岩」に当たって折れながらも進み続ける「花の塊り」が回り出す「この針先の一点」とは、「マクシマスより、グロスターへ、七月十九日 日曜」の「渦」と同一の場を指しているのではないか。すなわち「溺死した男たちが、よみがえる／渦」を。

ならば、こう言えるのではないか。夢から覚醒したマクシマスは、第五の夢の後、自己をめぐる夢の外部へ出て、グロスターという共同体の一員となったのだ、と。そして、ここにこそ『マクシマス詩

編』の始まりがあるのだ、と。

八六

*本研究は平成十一年度椋山女学園大学学園研究費助成を受けてなされたものである。

注

*本稿は、前号同様一九九七年十一月十五日名古屋大学で開かれた日本アメリカ文学会中部支部十一月例会で行った口頭発表「夢の記述——*The Maximus Poems*, “The Twist”について——」に基づいている。

(1) 拙論「夢の記述——『マクシマス詩篇』「トゥイスト」について——」(上)『椋山女学園大学研究論集』第三十号「人文科学篇」(一九九九年)一四八—一四九頁。

(2) George F. Butterick, *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson* (Berkeley: University of California Press, 1978) 一一五頁の“Pound dist. between chant & letting the song lie in the thing itself—and I planting zenias etc. for him in the wet soil (indoors!) of his house.”を参照。

(3) Robert von Halberg, *Charles Olson: The Scholar's Art* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1978) 一七三頁。

(4) 拙論「夢の記述——『マクシマス詩篇』「トゥイスト」について——」(上)一四九—一五〇頁参照。

(5) 拙論「夢の記述——『マクシマス詩篇』「トゥイスト」について——」(上)一四六頁下段の地図参照。

(6) 原文は次の通り。
Thurs May 15

Dreamt Con had left me, & was living in an apt house which was both Bohemia & a gingerbread house—the rooms on different levels, & the sense of the life lived in the house, like little people might in a cake
I came with Kate to look her up, sort of the morning she moved in. And

there was a heavy woman, a sort of nurse or companion to her... who tried to prevent me from seeing her. [With] Kate sort of hidden behind her, I got sore, & was ready to sock this woman, when she told me what room Con was in—48-50, I think was the room (It was going around looking for it that I had this sense of the place as gay, & candy. At first I thot the typewriter I cld hear was Con. But it wasn't. The dream cut off when I got to the room.

Approaching the apt, I noticed a house next door which I quickly thought was a gangster's hideout. And just then the back of some gangster I did recognize (a tout or bookie) was seen going in the door.

George F. Butterick, *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*, 1二八—一二九頁。

(7) George F. Butterick, *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*, 1二九頁。

(8) Sherman Paul, *olson's push: origin, black mountain, and recent american poetry* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1978), 1五八頁。

(9) George F. Butterick, *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*, 1二九—1三〇頁。及び Sherman Paul, *olson's push*, 1五八頁。

(10) 拙論「夢の記述——『マクシマス詩篇』『トゥイスト』について」(上) 一四六頁上段参照。

(11) George F. Butterick, *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*, 1三〇頁。

“Outside, in the street, it was early morning... (rest is gone) A damned unpleasant dream—myself, weak throughout—strong feeling of mother (something, in that village—house, Gloucester?—of my father? the houses of the village were strong (like that cardboard village I had as kid)…”

(12) Melvin T. Copeland and Elliott Rogers, *The Saga of Cape Ann* (Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1983), 一八〇頁。

(13) 一九五九年七月十九日「グロスターで書かれた」とペトリックは書く。George F. Butterick, *A Guide to the Maximus Poems of Charles*